

第二号 「伝説」

メルマガ《noichi》第二号は、煙に巻かれた不思議なお話に焦点を当てます。人から人へ脈々と伝えられてきた芸事の世界には、時に、嘘みたくない本当の、でも嘘かもしれない話があります。それを人は『伝説』と称し、代々、何十年、何百年にも亘って語り継がれてきたことに、一つの真実を見出しています。

昔々、市ヶ谷左内町の中島家には、それはそれは沢山の人間が家元を訪ねて来たという。ある日のこと。「自分は忍者だ」と名乗り出る者が登場、一同、嘩然とした。しかし、そこはさすが家元。「では、お前が忍者である証拠を示してみろ」。するとその忍者、わかりましたと言つてササツと天井を歩いてみせた。という、嘘みたくない本当の話。

宮城道雄が若い頃、伝説の名人・長谷幸輝（ながたにゆきてる）に、いわくの名曲「青葉」を弾いて聴かせてもらえないかと願ひ出した。「でも、あの曲を聴いたら、貴方は気が変になってしまいかもしれないから」と忠告された宮城は、「この際、自分の気が変になってしまつても構わない」と言つて、長谷に「青葉」を奏してもらつたのだという。後年、宮城はラジオ番組で「あの時は、本当に気が変になってしまひそうになつた」と語つたという、嘘みたくない本当の話。

大昔、日本からインドへ物資を運ぶことがあつた。インドで物資を積み降ろし、やれやればしばしば日本へ戻ろうかと思つたが、そのままの空っぽの船で再び海に出ると転覆してしまふ危険があつたので、間に合わせて積み込んだ物が、当時インドに生息していた大量のカリンの木であつた。今日、三味線の材料にカリンが使われるようになった、そもそのルーツがここにあるという、嘘みたくない本当の話。

正派邦楽会館の玄関に展示してある箏の名器「富士」。これは、職人が一か八かの大博打で購入した大木の中から取ら



名器「富士」

れた楽器であつた。随分後になって、同じ大木から「富士」と向かい合せて切り取られたもう一面の箏があることが判つた。片方は家元に。もう片方は別の人の手に渡る筈であつたが、納品の日の朝になって、一本の電話が入る。その受取人が、急逝したという。「呪いなのか、ただの偶然なのか」職人は一晩思い詰めて、行き場を失つた箏を時が来るまで封印したのだという。その箏は、「富士」を鏡で映したように木目が対（つい）になつていて、今も、某楽器店の蔵に眠つているという、嘘みたくない本当の話。

「七月」「京都」と言えば

滋賀大学非常勤講師 井口はる菜

七月の京都は祇園祭「色」に染まると言っても過言ではない。実際は、七月一日から一ヶ月にわたってほとんど連日、様々な行事が行われているのであるが、やはり十七日の山鉾巡行が最も有名であろう。この日、京の町は平安絵巻を一目見ようと集まる多くの観光客でいっぱいになる。もともと、この山鉾巡行は、京都に疫病が流行した際に、その疫神を集めて生活圏から追い出すことを目的として行われたもので、山や鉾が賑やかで美しく飾られるのは、疫神を寄せ集めるための最上の趣向であるという。

現在の祇園祭では、全三十二基の山鉾が京の町を彩るが、その中に、十三弦の琴（本当は「箏」であるべきだが、ここでは「琴」と表記しておく）を主題としている山が「一基ある」。ご存知の方も多いだろうが、それは「伯牙山」である。この山は、琴を割る伝説に基づいているために、もとは「琴割り山」と呼ばれていたもので、以前の名のほうが知名度が高いとも言われている。

実は、中国の琴割りの伝説には二つある。一つは、この山の現在の呼称となった伯牙にまつわる断弦の伝説である。伯牙は春秋時代の琴の名手で、その友人で琴を聴く名人であった鍾子期の死去を悲しみ、弦を絶つて以後二度と琴を奏することは無かったという。もう一つは、東晋時代の戴逵（戴安道とも）にまつわる伝説である。戴逵は琴に限らず書画その他の芸にも通じていた多才な人物であったが、武陵王が伶人として彼を召し抱えようとする、使者の目で琴を叩き割り応じなかった、つまり「琴割った」断った」というのである。

当山の上で今にも叩き割ろうと、置かれた琴を凝視する御神体は、その装束や「琴割り山」という前名などから考えて戴逵であってもおかしくないのだが、何故か明治四年

の改名の際には「伯牙」が山名として選ばれ、御神体も伯牙であると言われている。

いずれにしても、伝統ある祭礼の中で、琴（箏）を主題とする山が毎年大きな役割を果たすために京の町に出現していることは、この楽器に携わる者にとつてなんとなく嬉しい。この山の裾幕や粽に、琴柱を散らしたデザインが施されていることにも、親近感を覚えるのである。

今年もまもなく、伯牙山が都大路を巡行する。



「後援者」

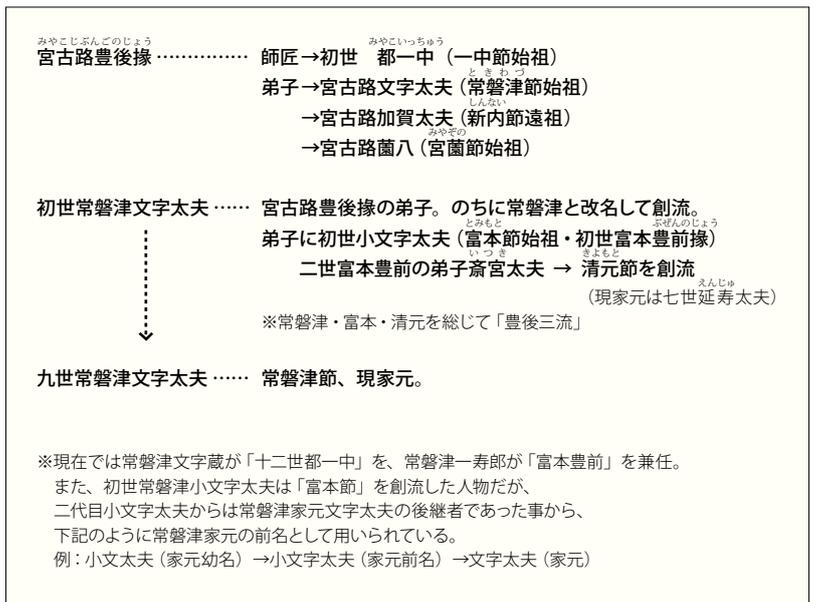
——徳川宗春と豊後掾——

重要無形文化財常磐津節太夫方 常磐津小文太夫

「常磐津節」は「唄う」というよりも「語り」を主とする邦楽で、いわゆる「浄瑠璃」と言われています。浄瑠璃は関西では義太夫節、関東は豊後節となり、この豊後節の一番の流れを汲むのが常磐津節です。また、常磐津から富本節、富本から清元節と生じることから常磐津、富本、清元を豊後三流と呼び、豊後節を語った宮古路豊後掾の一番の高弟が初代常磐津文字太夫というわけです。

さて、題名にある後援者の話になりますが、茶道や能楽が将軍家や諸武家からパトロネージュされていたように、常磐津節にも後援者がいました。と言っても常磐津が全盛となる時代の後援者は、いわゆる資本金がふんだんにある「商人」です。当時の歌舞伎役者や演奏者は、より強力な後援者を得ることでその地位を磐石なものにしてきました。初代常磐津文字太夫の師である宮古路豊後掾の後援者は「徳川宗春」といわれています。

宗春は尾張徳川家の七代藩主ですが、浅黄の頭巾にべつ甲の丸笠、黒い衣装に黒足袋と大名らしからぬ、いわゆる奇天烈な「傾き者」の格好で芝居見物など派手に遊興し、享保の改革を行った当時の八代将軍「徳川吉宗」とは真つ



向から意見の違う人物でした。

一七〇〇年台はじめに豊後節が将軍徳川吉宗により禁止されます。作品内容の多くが「心中もの」であり、感化された若者の心中事件が多発したことが原因と言われているが、一説では吉宗と宗春との衝突の巻き添えを食ったという事があります。「將軍としての地位を頑なにしたい」という吉宗と、「徳川御三家の格はすべて等しい」という宗春とではスタイルも意見も全てが異なっていたようです。

たしかに宗春と同じく、宮古路豊後掾の出立ちも相当「傾いて」いました。足まで届く長羽織に、「文金島田」の元となるくらい女性的な鬘（髪型）、お小姓に先を持たせた非常に長い煙管などは流麗華美で、質素儉約に相反する姿は

將軍吉宗にとって、たいへん目障りであったのでしょう。当時流行った狂歌に、
「河東袴、外記袴、半太羽織に義太股引、豊後かわいや丸裸」というものがあります。

「河東節は袴をつけているかのように高尚で、外記節は準じて上品、半太夫節は羽織を羽織っている位で、義太夫節はまるで股引だ。豊後節に至っては何も身に纏っていないほど官能的だ」という意味ですが、現在の評論家が詞章を分析してみても、扇情的だが弾圧するほどでもなく、ましてや節付けの高尚さは河東節に決して劣らないとの事です。

後援者の私的な争いに巻き込まれた弾圧ですが、この事があったからこそ、宮古路豊後掾の弟子、文字太夫が独立し、現在の「常磐津節」を創流した事を考えると、すべて物事は「塞翁が馬」であったのかもしれない……とも思う今日この頃です。

TNBのそれっぽい話2



三味線演奏家 田辺 明

日常生活において何の気なしに聞こえてくる音や音楽に気を留めてみると、音楽的・楽典的にさまざまな発見があったり(なかつたり)します。

今回のテーマ「伝説」で連想するのは、「ゼルダの伝説」、「餓狼伝説」、「ドラゴンクエストⅢ」そして伝説へ〜ということとゲーム音楽。私はいわゆる「ファミコン世代」に入るのでしようか、ゲームのBGMには耳に残って離れないものもあります。有名なのは「スーパーマリオブラザーズ」。今でもそのイントロを聞けば、その世代の人は誰でもわかるというくらいの知名度でしょう。こうしたゲーム音楽から一躍有名になった作曲家もいます。すぎやまこういち氏(代表作:ドラゴンクエストシリーズ)、植松伸夫氏(代

表作:ファイナルファンタジーシリーズ)、菅野よう子氏(代表作:信長の野望シリーズ)等々。ちなみに私は信長の野望の群雄BGM「時の調べ」が眠れないほど脳裏を駆け巡った記憶があります……。

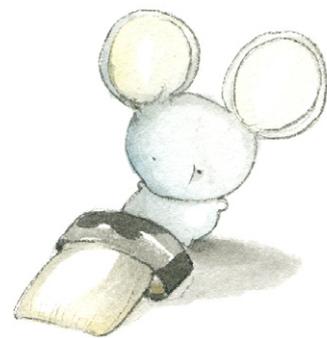
任天堂ファミリコンピユータ(通称:ファミコン)の当時は電子音の3和音のみでしたが、今となってはその音楽もオーケストラの演奏を使ったりしているものもあります。しかし、当時の電子3和音の単純さ・レトロさが耳に残って記憶から離れない反面、最近の壮大なものは素晴らしいのだけれど、複雑化していて記憶に残りにくい気がします。これは古典・現代

を含めた三曲音楽についても同じことが言えると思います。複雑な和声や技巧的な旋律・拍子もいいますが、砧地や巢籠地といった音型など、単純ですが案外口ずさみたくなると思います。仮にはじめてでもどこかつかぬ感じが、耳に、記憶に残させるのでしょうか。ファミコンがやりたくなってきました。ファミコンの調子が悪い時、本体とカセットの接続部分を息でフーフーしてから差込むとすぐ直るといって、都市伝説”があります。信じるか信じないかはあなた次第です。

8月の演奏会情報

- 6日 全国学生邦楽フェスティバル
<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~gakufes/>
- 6~7日 平安神宮 坂東玉三郎 京の七夕歌舞伎
<http://www.tamasaburo.co.jp/>
- 13~16日 稚魚の会・歌舞伎会 「辰駕」
http://www.ntj.jac.go.jp/schedule/kokuritsu_s/2011/363.html?lan=j
- 22日・23日 京都創生座第6回公演
<http://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000103645.html>

邦楽英単語講座・その二:ことづめ(琴爪)は英語でpick(s)と言います。ギターのパックと同じです。



Pick(s)

Illustration: urara okuda

◎あともがき◎

民俗学者の柳田國男は「日本の伝説」という本の中で、「例えるなら、伝説は植物で、昔話は動物である」と書いている。その土地と信仰に根付き、広く生息する伝説。少しずつ進化しながら土地を自由に動き回る昔話。民俗学という学問でありながら、植物と動物をどうとらえるかという問題も含め、文学的に説明しているのが、いかにも柳田國男らしい。

今回、奥田雅楽之一がご紹介した伝説は、今は市ヶ谷あたりにひっそりと生息している。いつか時代を超えて伝えられるうちに、表紙のヤマブドウのように、日本の山々に力強く根を張るようになるのだろうか。

妖美な音を響かせる「富士」の話は、できれば動物になつてほしい。「箏富士」という妖怪となって、離ればなれになつてしまったもう一人の箏富士を探してきまよひ、日本中の人に、絹糸の柔らかい音を聞かせてほしい。

グラフィックデザイナー(<http://www.1938.jp>) みやはらたかお